

り丁度死んだ時刻にあつてゐることを知つたなどは、今でも、全然無いことではないというようにいわれてゐる。

お盆には盆火を焚いて靈魂を盆棚に迎え、終ればお送りする。その時お婆さんなどが、背に両手をあてて、墓よりおぶつてくるなどと語つていたが、今の若い者に信じられるかどうか。しかしまだ、靈魂は全く実在しないと、これを否定できる人もないように思われる。

死去以前に一族へ知らせに行くのをせつかくといつてゐる人がいる。折角の知らせの意であるというが、よく意味はわからない。

貞享二年の風俗帳に、死んでから二、七日、即ち十四日目、三、七日、即ち二十一日目に、わかを頼んで口よせをするということが書いてある。岩手の山村などは、現在もこの風をもつてゐるところがある。北会津村で、現在このような日に、必ずおわかさまを呼んで口よせをするというようなことは聞かないが、近年までこのような風が全くなかつたとはいえない。

七月一日から冬木沢参りが始まる。新仏の家や近親の人々が参る風習があるが、ここにはもと、口寄せをするおわかさんが集つてきて、死人の代りに、近親の間に対して答えていたことがある。今でも青森県下北半島の恐山などの祭日にはこの口寄せが行なわれている。

そこまで考えつめなくとも、死人ができる、一方魔よけといつて刀剣などの刃物を死体にのせながら、枕だんごを供えたりして、ねんごろに葬うことは行なわれているから、靈魂の不在を信じてもないようにみえる。

2、葬礼 まず近所の婆さんたちが集つて、死者の衣裳縫いをやる。脚絆、白衣、おいじるに至るまで、白布でつくつてまとわせ、仏つくりを行なう。他方葬式の飾りつけなどの仏つくりは老人の念仏爺さんたちが行なう。